

ESD ユネスコ世界会議交流セミナー報告書

団体名 国連大学サステイナビリティ高等研究所(UNU-IAS)

【ESD ユネスコ世界会議の成果】

国連大学サステイナビリティ高等研究所(UNU-IAS)、環境省、地球環境パートナーシッププラザ(GEOC)が開催した交流セミナー「地域のステークホルダーをESDでつなげよう」には、NGOや自治体職員、教育関係者など約70名が参加しました。はじめに、会議のコーディネーターを務めた及川幸彦氏(宮城教育大学協力研究員)が趣旨説明を行い、この会議を通して、地域で実践されてきた様々な「つながり」やESDの取組を共有し、今後のESDのさらなる発展につなげたいと述べました。



リソースパーソンによる話題提供では、永田佳之氏(聖心女子大学教授)が、陸前高田での「心に笑顔を」プロジェクトを例に、ESDは地域の文化や慣習、ニーズに合った、調和的・内発的な発展を促すことが重要であると指摘しました。続いて、アベル・アティティ氏(UNU-IASリサーチ・フェロー)が、国連大学が推進する「ESDに関する地域の拠点」(RCE)のこれまでの取組と成果について話しました。続く事例発表では、大学と動物園による環境教育の連携(宮城教育大学教授・齊藤千映美氏、仙台市八木山動物公園園長・大内利勝氏)、東北地域のNPOによる地域に根ざした環境教育プログラムの開発(みやぎ・環境とくらし・ネットワーク事務局統括・小林幸司氏)、陸前高田における地域住民参加型の芸術活動を通したオープンスペース作り(美術家・田窪恭治氏)、綾ユネスコエコパークの森林教育やユネスコスクールの取組(日本自然保護協会部長・朱宮丈晴氏)、環境パートナーシップオフィス(EPO)による環境教育モデルプログラム作成事業(環境パートナーシップ会議副代表理事・星野智子氏)など、地域のステークホルダーが様々な形で「つながり」を育んできた実践例が紹介されました。



パネルディスカッションでは、グローバル・アクション・プログラム導入後の地域のステークホルダーの連携の課題や展望として、社会教育施設と学校をつなぐコーディネーターの活用や企業セクターの参画、地域のローカルリソース(人、情報)の有効活用、地域のグッドプラクティスの発掘と共有が重要との指摘があり、引き続き人・組織・情報などのつながりを深め、持続性のある取組によってESDを地域に根付かせていくことを再確認しました。



パネルディスカッションでは、グローバル・アクション・プログラム導入後の地域のステークホルダーの連携の課題や展望として、社会教育施設と学校をつなぐコーディネーターの活用や企業セクターの参画、地域のローカルリソース(人、情報)の有効活用、地域のグッドプラクティスの発掘と共有が重要との指摘があり、引き続き人・組織・情報などのつながりを深め、持続性のある取組によってESDを地域に根付かせていくことを再確認しました。

【今後の展望】

UNU-IASは、政策に直結する研究を行うシンクタンクとして、今後の政策の推進に貢献するとともに、RCEの活動や高等教育機関におけるESDの取組の推進を通じて、地域レベルでのESD活動ならびに学習環境の転換を支援し、世界全体のESD活動の発展に貢献していく予定です。また、環境省やGEOCとともに開催するセミナーやシンポジウムなどを通して、ESDに携わる人や団体をつなぐ活動や情報発信を続けていくこととしています。